

平成25年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書
【要約版】

 平成26年2月
独立行政法人農畜産業振興機構

I アンケート調査

1 経営概況

(1) 飼養頭数

■平成25年3月末時点での肥育牛飼養頭数規模別の経営体数の分布は、「200～300頭未満」13%、「300～500頭未満」16%、「500～1,000頭未満」15%、「1,000～1,500頭未満」7%、「1,500～2,000頭未満」3%、「2,000～3,000頭未満」6%、「3,000頭以上」7%であり、7割近くが200頭以上の経営体であった。

■1経営体当たりの肥育牛平均飼養頭数は、黒毛和種および交雑種は増加傾向、乳用種は減少傾向で推移している。

(2) 経営耕地面積、畜産用地

■肥育牛飼養頭数規模別の1経営体当たりの経営耕地面積は全体では27.6ha、200頭以上の経営体では27.5ha、畜産用地は全体では5.7ha、200頭以上の経営体では7.2haであった。

(3) 経営形態

■畜産専業・兼業の状況は、全体では「畜産専業」74%、「兼業経営」26%、200頭以上の経営体では「畜産専業」83%、「兼業経営」17%であった。

■経営形態は、全体では「肥育専業経営」53%、「繁殖・肥育一貫経営」24%、「乳肉複合経営」9%であった。200頭以上の経営体では「肥育専業経営」63%、「繁殖・肥育一貫経営」22%、「乳肉複合経営」7%と、飼養規模の大きい経営体の方が肥育専業経営の割合が高くなっている。

(4) 売上高

■農業経営体全体の売上高は、「1～2億円未満」(23%)が最も多く、全体では平均3億7,980万円、200頭以上の経営体では平均5億6,120万円となっている。

■肉用牛関連の売上高は、全体では「～5,000万円未満」(28%)が最も多く、平均3億2,490万円となっている。200頭以上の経営体では「1～2億円未満」(31%)が最も多く、平均4億8,230万円となっている。

(5) 労働力

■肉用牛関連に従事する家族労働力は、全体では2.6人、200頭以上の経営体では2.9人であった。

- 肉用牛関連の正社員は、全体では4.9人、200頭以上の経営体では5.8人であった。
- 肉用牛関連の非正社員は、全体では2.7人、200頭以上の経営体では3.1人であった。
- 肉用牛関連の年間臨時雇用者は、全体では111.3人日、200頭以上の経営体では123.0人日であった。
- 肉用牛関連作業における1日当たりの平均労働時間は、全体では7.1時間、200頭以上の経営体では7.8時間であった。飼養管理労働時間（飼料給与、敷料搬出入、牛体手入れ等の飼育の直接労働）が全体の8割を占めている。

2 生産費（肥育牛1頭あたり）

- 品種別に見ると、全体では黒毛和種913,369円、交雑種681,082円、乳用種454,187円、肥育200頭以上の経営体では、黒毛和種847,909円、交雑種645,650円、乳用種421,888円となっている。
- サンプル調査ということから、必ずしも生産費構造のモデルを示しているものではないものの、品種別飼養頭数規模別の肥育牛1頭当たりの生産費は、飼養規模の大きい経営体の方がおおむね低くなる傾向がみられる。
- 1年前と比べた生産費の増減では、半数以上の回答者が「購入飼料費(59%)」「もと畜費・購入(56%)」が「増加した」と回答している。昨今の飼料費やもと畜費の高騰の影響が、本調査結果でも表れた形となった。

<生産費（肥育牛1頭あたり）>

		もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	自給飼料費 (円)	敷料費 (円)	光熱動力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	減価償却・建物・構築物 (円)	減価償却・農機具・車両 (円)	小農機具費 (円)	修繕費・建物・構築物 (円)	修繕費・農機具・車両 (円)	生産管理費 (円)	雇用労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費(円) 副産物価額を差し引く	平均販売価格 (円)
黒毛和種	全体	415,017	268,510	23,878	14,279	14,397	8,699	12,990	10,772	8,313	23,919	18,133	6,674	9,112	11,743	9,686	39,108	12,400	5,738	16,408	913,369	793,869
	200頭未満・計	450,385	275,855	33,661	14,721	20,438	13,374	18,416	18,844	12,912	45,683	41,196	3,100	19,810	28,026	11,904	38,222	16,833	6,619	55,882	1,070,001	816,455
	200頭以上・計	399,859	265,991	18,364	14,108	11,793	6,747	10,658	7,029	6,232	16,414	8,348	7,758	4,919	5,659	8,696	39,321	10,738	5,275	6,956	847,909	778,267
交雑種	全体	209,241	256,986	21,842	13,615	13,542	8,024	12,079	10,310	7,729	22,309	16,520	6,376	8,354	10,696	8,890	37,114	11,864	5,590	15,269	681,082	510,847
	200頭未満・計	152,000	252,777	30,110	14,212	18,530	12,318	17,304	17,406	12,186	41,463	36,354	3,089	18,214	25,138	11,048	36,926	15,633	6,429	50,388	721,136	478,509
	200頭以上・計	214,852	258,431	17,182	13,382	11,410	6,211	9,833	6,971	5,753	15,628	8,106	7,273	4,592	5,359	7,909	37,159	10,450	5,150	6,861	645,650	520,156
乳用種	全体	91,683	194,535	17,013	10,305	10,316	6,543	9,352	8,394	6,098	17,535	12,568	5,146	6,580	8,334	7,516	28,768	9,241	4,262	11,776	454,187	270,809
	200頭未満・計	70,000	194,500	23,487	10,874	14,254	9,830	13,638	13,968	9,353	32,347	27,586	2,750	14,162	19,541	8,925	29,654	12,100	4,905	39,135	511,873	219,750
	200頭以上・計	93,128	194,547	13,364	10,082	8,632	5,095	7,531	5,651	4,576	12,181	6,197	5,727	3,608	4,100	6,840	28,563	8,141	3,925	5,225	421,888	302,231

3 もと畜の導入状況

- もと畜の導入先は、品種に関わらず「家畜市場」が最も多くなっている。
- もと畜の年間外部導入頭数は、全体では「黒毛和種」204頭、「交雑種」332頭、「乳用種」758頭となっている。肥育牛200頭以上の経営体では「黒毛和種」271頭、「交雑種」381頭、「乳用種」824頭である。
- 1頭当たりの導入価格は、全体では「黒毛和種（去勢・雄）」41.5万円、「黒毛和種（雌）」34.9万円、「交雑種（去勢・雄）」20.9万円、「交雑種（雌）」17.0万円、「乳用種」9.2万円である。肥育牛200頭以上の経営体では「黒毛和種（去勢・雄）」40.0万円、「黒毛和種（雌）」34.6万円、「交雑種（去勢・雄）」21.5万円、「交雑種（雌）」17.8万円、「乳用種」9.3万円である。
- もと畜（黒毛和種）を外部から導入する際に重視する点は、「価格」（76%）、「体型の良し悪し」（72%）、「健康状態」（70%）、「血統」（67%）、「発育状態」（59%）が上位となっている。「血統」よりも、実際のもと畜の状態を重視する肥育業者が多いことがうかがえる。一方、交雑種や乳用種は、黒毛和種と比較すると、導入時のこだわりは強くないことがうかがえる。

4 肥育牛の出荷状況

- 黒毛和種の年間出荷頭数は、全体では「去勢・雄」195頭、「雌」181頭、「平均」188頭となっている。200頭以上の経営体では「去勢・雄」が264頭、「雌」が249頭、「平均」が257頭である。平均販売価格は、全体では市場出荷1頭当たり75.4万円（枝肉単価1,644円/kg）、相対取引1頭当たり75.1万円（枝肉単価1,641円/kg）となっており、市場出荷と相対取引の価格差はほとんど見られなかった。200頭以上の経営体では、市場出荷1頭当たり74.8万円（枝肉単価1,605円/kg）、相対取引1頭当たり74.6万円（枝肉単価1,624円/kg）となった。
- 交雑種の年間出荷頭数は、全体では「去勢・雄」410頭、「雌」295頭、「平均」353頭となっている。200頭以上の経営体では、「去勢・雄」は486頭、「雌」が363頭、「平均」が424頭である。平均販売価格は、市場出荷1頭当たり48.4万円（枝肉単価1,001円/kg）、相対取引1頭当たり51.4万円（枝肉単価1,060円/kg）となっている。200頭以上の経営体では、市場出荷1頭当たり49.7万円（枝肉単価1,005円/kg）、相対取引1頭当たり52.0万円（枝肉単価1,068円/kg）となった。
- 乳用種の年間出荷頭数は、全体では669頭、200頭以上の経営体では775頭であった。平均販売価格は、市場出荷1頭当たり27.1万円（枝肉単価624円/kg）、相対取引1頭当たり29.9万円（枝肉単価657円/kg）となっている。

5 繁殖雌牛の種付状況

■黒毛和種の受胎率は、全体では「人工授精」76%、「受精卵移植」66%、「自然交配」75%となっている。交雑種は「人工授精」70%、「受精卵移植」80%、乳用種は「人工授精」48%、「受精卵移植」54%となっている。

6 飼料の給与状況

■飼料給与状況について見ると、全体では、「稲わら」、「成畜用配合飼料」、「ふすま」、「とうもろこし」、「大麦」、「イタリアンライグラス」、「ビールかす」、「大豆油かす」が上位となっている。

7 敷料の使用状況

■敷料については、「おが粉」が圧倒的に多く、使用率は9割前後となっている。

8 取り組んでいる経営努力

■現在抱えている経営上の課題としては、「生産コストの低減」「資金繰り」との回答が特に多い。

■取り組んでいる経営努力としては、全体では「低コストでの飼料調達に努めている」(59%)、「もと畜を低コストで導入する」(40%)、「低コストでの敷料調達に努めている」(40%)、「自給飼料生産に取り組む」(31%)となっている。200頭以上の経営体では、特に「低コストでの飼料調達」に対する取り組みに積極的である(66%)。

■肉牛生産に対する情報化への関心度は、全体では「関心がある」が49%となっている。具体的には、「飼料給与管理」、「成績評価の管理」、「生産原価管理、損益管理」、「疾病管理、治療情報」、「繁殖情報の管理」などの業務で推進したいとの回答が多く得られた。

■今後3年間の経営展開については、「現状維持」が最も多く、全体では38%、200頭以上の経営体では46%を占める。一方で、「肉用牛(肥育)の規模拡大」が全体および200頭以上の経営体でも21%を占めている。

II 現地調査

1 6次産業化で収益安定を目指す黒毛和種肥育経営（山形県・A牧場）

■山形県・A牧場は、黒毛和種（雌）260頭を飼養し、なおかつ、レストランや牛肉の小売り（直接販売）などの6次産業化を展開している。

■経営内に焼肉店部門を有するとともに、グループ会社である温泉ホテルにおいて牛肉を販売するなど、加工と直接販売による6次産業化に先進的に取り組んでいる。A牧場では、肉用牛部門と6次産業化部門が相互にメリットを享受できる仕組みを構築している。その特徴として、①焼肉店や温泉ホテルへ牛肉を供給するために肉用牛牧場が設立した、②「山形牛」のブランド肉生産を基本にしている、③出荷牛の半数程度を焼肉店などで直接利用している、④食肉市場で安値取引される肥育牛を自家取りしている、⑤その結果、実質的に安値取引は解消し、大きな経済的メリットを実現している、⑥焼肉店や温泉ホテルでは自家産牛肉をセールスポイントにして営業していることが挙げられる。



マス（牛房）飼いされる肥育牛

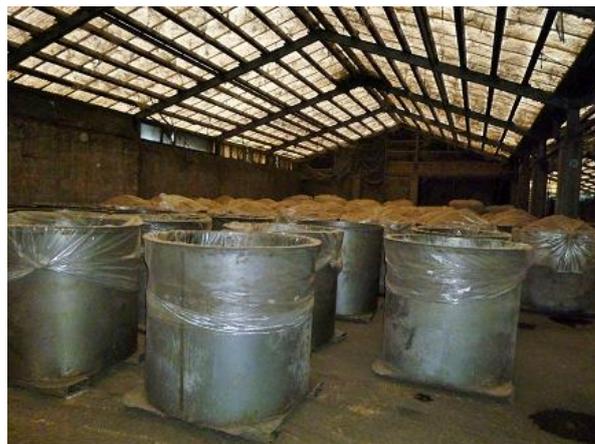
2 発酵飼料による高品質牛肉で販路多角化を進める大規模肉用牛経営（沖縄県・B牧場）

■沖縄県・B牧場は、黒毛和種肥育牛（2,143頭）を主体に、繁殖雌牛（40頭）の導入も始めた大規模肉用牛経営を展開している。

■B牧場で使用される粗飼料は稲わら・麦わらと生ビール粕である。稲わらは中国産、麦わらも業者を通じて輸入している。生ビール粕は地元のビール工場からほぼ無償で入手している。配合飼料は飼料会社から購入している。この配合飼料と生ビール粕を原物で6：4の割合で混合し、アルミタンクに貯蔵、発酵させて飼料を調製している。この発酵飼料には、血中コレステロールを抑制する働きをする不溶性食物繊維であるリグニンを溶かすなどの作用があり、この飼料で生産された牛肉は不飽和脂肪酸が高いことが証明されている。そのため、肉の品質が高く、その枝肉は数々のコンクールで受賞し、平成25年には全畜連肉用牛枝肉共進会・黒毛和種去勢牛の部で最優秀賞である「農林水産大臣賞」を受賞している。

■B牧場で生産された肥育牛は、地元の港から鹿児島県にある食肉加工会社に生体で運搬され、と畜・処理される。業務提携している大手食肉会社が御販売するときには「沖縄県産牛」や地名を冠した

ブランド名で取引されている。一方、B牧場が焼肉レストランで使用する枝肉は、価格決定後に年間80～100頭を買い戻している。これは全体の出荷頭数の1割未満に過ぎないが、焼肉レストランの営業により牧場名のブランド力が高まり、大手食肉会社に販売する肥育牛の価格交渉にプラスの効果が表れている。



発酵飼料貯蔵用のアルミタンク

3 自家配合飼料の活用で低コスト生産に挑む交雑種中心の肥育経営（北関東・C牧場）

- 北関東・C牧場は、肥育牛年間出荷頭数600～700頭の約9割を交雑種が占めている。
- C牧場の牛肉生産のコンセプトは、あくまでも消費者に手の届く牛肉をさまざまな飼料資源を活用して合理的に生産する、ということにある。

- 現在、C牧場ではさまざまな原材料を用いて自家配合飼料を製造している。主な原材料は、麦類（大麦、小麦）、圧片とうもろこし（単味）、既成の配合飼料であり、これらで全体の約半分を占める。

飼料用米についても2年ほど前から利用を開始し、徐々に混入割合を増やしている。このほか、ビール粕、大豆皮、豆腐粕（乾燥）、ふすま、菓子残さなどを利用している。製造する肥育用の自家配合飼料は1種類に統一し、同じものを交雑種と黒毛和種に給与している。有利に利用できる原材料は積極的に活用する方針で、入手可能な段階で早期に自家倉庫に搬入し、貯蔵している。



製造された自家配合飼料

- 粗飼料については、育成用に輸入乾草、輸入とうもろこしサイレージ、肥育牛へは国産稲わら（入手元は近県の各地、業者から購入）を給与し、ハンドリングの関係から一部に輸入稲わらも利用している。

4 乳用種主体から交雑種・黒毛和種主体に転換した大規模一貫経営（山陰地方・D牧場）

■D牧場は、乳用種主体から交雑種・黒毛和種主体に転換した大規模一貫法人経営である。肉用牛部門のほかに、酪農部門の2部門3組織から成っている。平成24年度末時点の飼養頭数は、交雑種3,725頭、黒毛和種3,461頭である。

■D牧場は昭和59年から収益を確実に確保している。その際、収益源となったのがD牧場の堆肥事業であった。昭和60年からは国営農地開発事業、昭和63年からは土木・緑化事業、平成4年～平成5年には石見空港開設に伴う空港内の緑化事業、さらに、平成2年以降の「法面」への吹き付け業者への堆肥の取引が始まったことで、安定した供給先が確保され、D牧場の売上高、収益の拡大に寄与していった。



D牧場の堆肥の攪拌装置

■収益の拡大に伴い、集合動産担保や無担保融資などを利用して、飼養頭数の増加を図っている。

■平成19年には、牧場内に飼料工場を設立し、もやし、フルーツ、みかん粕、焼酎粕などの食品残さに、豆腐粕、飼料用米や乾草などを混合した配合飼料を30トン/月生産し、肥育前期と酪農部門に給餌している。

■繁殖、哺育、育成、肥育段階ごとに、7名の常雇・臨時職員が飼養管理を行っている。また、牛舎の屋根には太陽光パネルを設置して、光熱動力費の削減にも努めている。